

庚申さま

上谷中を歩く

路傍や寺社の境内、墓地などで石造物を見掛けることがあり、石塔正面に彫られた仏像や側面に刻まれた文字から造立のいわれなどを知ることができます。

庚申さまと呼ばれる「庚申塔^{こうしんとう}」は江戸時代、村や集落ごとの講などで建てたものが旧八日市場市域で140基ほど確認できます。

す。

江戸時代の庚申年は1680(延宝8)年、1740年(元文5)年、1800(寛政12)年、1860(万延3)年が当たり、1700年代に入って造塔が増えました。

今回紹介する庚申塔は、上谷中・新宿の総武本線の線路脇にあり、正面上部に青面金剛を表す梵字^{ぼんじ}(種字^{しゅじ})、その下に「奉る庚申待ち、二世安樂^{にせいあんらく}の所なり」、左右に「延宝八庚申天十一月五日、谷中村中」と刻まれています。

60日ごとに回ってくる庚申の日に講仲間の家を順番でヤド(宿)とし、庚申さまの掛け軸をつるし、飲食などで夜通し過ごしたとされます。1970

(昭和45)年ごろまでは庚申講が続けられていた地区もあったとされ、堀川西・吉祥院には掛け軸が残されています。

上谷中村が成立して数十年経過しても旧村名の「谷中村」が使われ、籠部田との村境を示す場所に庚申塔をまつたのでしょうか。

東谷区にも「東谷村 安養寺 同行三十人」と刻まれた同型の塔があり、同時に発注したのかも知れません。この2基を含め1680年に建てられた4基が市内最古の庚申塔です。

多様な種類の石造物の中で庚申塔が最も多く、市内南部の真言宗寺院のある地域に建てられているのに対し、日蓮宗寺院の多い北部地域ではまったく見られず、「題目塔」が多いのも市内の分布状況の特徴といえるかも知れません。

(市文化財審議会委員・

依知川雅二)

「谷中村」の庚申塔